

九州に於ける甘藍の春採品種と原種採種に対する考察

飛高義雄・後藤忠彦

大分縣農業試験場

Hitaka, Y. & Goto, T. Consideration on the varieties for spring harvest & seed growing of original stock of cabbage, in Kyushu.

I. 緒言

甘藍は他の蔬菜類に比較して耐暑性、耐寒性共に強く、又品種は春蒔、夏蒔、秋蒔の三つの生態型まで進化しており、尙同一生態型に属するものには多数の品種、系統があつて、それらの環境適応性の差異はかなり高い。従つて、播種期と品種とを旨く組合せると共に栽培期によつて海岸暖地、高冷地、中間地等をそれぞれ利用すれば九州における周年栽培は可能である。しかし、この周年栽培で最も困難を伴うのは3月上旬から4月中旬にかけて収穫する栽培である。この時期の栽培を確立するためには、(1)低温結球性品種の選択、(2)暖地利用、(3)笹竹による保温、以上3点に注意すれば春採甘藍の栽培は成り立つ。この中で品種問題は甚だ重要であるが、従来明らかにされていないので、九州における春採品種の検討を試みた。次に従来から九州産の大根、甘藍等の種子は本州、北海道、満洲等の寒冷地で使用した場合早期抽苔を起すと言われ、特に最近では甘藍においてその声が高いので、九州と本州においてそれぞれ長年に亘り繰返し採種を行つたものと花芽分化期、抽苔及び開花期の比較を行つた。

II. 試験方法

供試材料の品種や播種期は第1図の通りであるが、何れも本葉3枚で1回移植を行い、6、7枚で2.2尺×1.8尺に定植した。

生長するにつれて葉数増加、収穫期、収量、抽苔及び開花期を調査し、一方花芽分化調査材料は本葉8枚時より15日毎に1品種3株宛採收して、葉数調査後75%のアルコールに固定し、剥皮法によつて検鏡した。

III. 成績と考察

(1) 春採優良種とその播種期及び今後における育種。春採品種としては9月15日蒔の豊田早生、愛知夏蒔、野崎夏蒔、渡辺成功2号、三池中生、9月25日蒔の豊田早生、愛知夏蒔、渡辺成功2号が良い成績を示した(第1図)。しかし、本試験を施行した年は暖冬異

変であつたので平年に比較して結球期が早くなつてゐること、及び春採栽培としては気候的に好条件であつたと想像する。しかるに、このような良い環境下においても前記優良種の結球緊度や太さは秋蒔や夏蒔栽培に比べて落ちる。従つて、今後特に九州においては春採品種の育種が痛感せられる。この品種の育成は本試験やその後の試験結果から見て、恐らく愛知夏蒔、野崎夏蒔、南部、豊田早生等より選抜出来ると思われる。

(2) 採種と花芽分化期、抽苔期との関係。富士早生について、久留米で5ヶ年採返しのものと富士早生の本場、静岡県富士町産とを比較して見れば次のようである。

1. 9月5日～10月5日播種のもは花芽分化期に大差はないが、抽苔期は久留米のものが早い。

2. 10月15日蒔では富士町産のものは3月下旬に花芽分化はしているが、抽苔はしない。しかるに、久留米産のものは1月下旬に花芽分化を起し、収穫期前の4月に抽苔、開花をしている。

サクセツションについては九州産の三池中生と宮城縣産の渡辺成功2号とを比較すれば次の通りである。

1. 9月15日と25日蒔では三池中生が渡辺成功2号よりも花芽分化期、抽苔期共に早い。

2. 10月5日蒔では三池中生は花芽分化はしてあるが抽苔しない。渡辺成功2号は花芽分化もしていない。

以上の成績から九州における原種採種の改善が痛感せられる。

(3) 原種採種の改善。九州における今後の原種採種

第1表 今後における甘藍の原種採種法

種 類	母本栽培及び採種
春蒔川種	春蒔越冬冬採種
夏蒔川種	夏蒔越冬冬採種
春採川種	品種により夏又は初秋蒔越冬採種
秋蒔川種	秋蒔3年子採種

